

氏名	岡坂 桜子
ヨミガナ	オカサカ サクラコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第589号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 ギュスターヴ・ジェフロワと国立ゴブラン製作所 —連作「フランスの諸地域と諸都市」を中心に— 〈作品〉 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	越川 倫明
(論文第1副査)			( )	
(作品第1副査)			( )	
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	田辺 幹之助
(副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	佐藤 直樹
(副査)	お茶の水女子大学	教授	( )	天野 知香
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	

(論文内容の要旨)

19世紀フランスの美術批評家、ギュスターヴ・ジェフロワ（1855-1926）は、長年、印象派をはじめとする「前衛派」を幅広く擁護し、そのキャリアの成熟期にあたる1908年、国営のタピスリー工房である国立ゴブラン製作所の所長に就任した。

17世紀半ばに国王直属の製作所として創設されたゴブランは、王政の正当性の提示と、王宮を含む公的建造物への設置を目的とするタピスリー製作を第一義としていたが、大革命（1789-1799）による旧体制崩壊後、王権称揚に代わる主題の模索に加え、19世紀フランスにおける絵画を取り巻く美学の一連の変化を受けて、かつての権威を失いつつあった。とりわけ第三共和政期（1870-1940）には、「絵画の模倣」や「過去の下絵の焼き直し」といった批判が高まり、加えて、世紀末から盛んになる産業・装飾芸術振興運動を背景に、タピスリー芸術は、装飾芸術という枠組みの中に置き直され、独自の造形のあり方が問い直されるようになる。こうした状況の中、所長に就任したジェフロワは、同時代の芸術家に下絵制作を依頼することで、ゴブランの活性化と刷新を試みていく。

18年間におよぶその活動は、ジェフロワ研究および近代タピスリー研究の双方において、非常に重要な功績であるにもかかわらず、依然として詳細な研究がなされていない。前者に関しては、すでに、パラディス（1985）やブロード＝ディリュイ（1987）などにより、一定の蓄積があるものの、これらはいずれも所長時代についてはわずかに言及するにとどまっている。他方、後者においても、1910～20年代のゴブランの実態は明らかにされず、実業家マリー・キュトリ（1879-1973）のタピスリー振興活動や、タピスリー作家ジャン・リュルサ（1892-1966）の1930年代以降の活動に、「タピスリーの近代化」という評価が集中する傾向にある。また、ジェフロワ所長時代の多数のタピスリーに関しても、シェレやルドンといった、当時すでに名声を確立していた画家に基づく作品ばかりが目され、モダニズム史観に依拠する評価の偏りが指摘できる。

そこで本研究では、ジェフロワの野心的な試みと言える、連作「フランスの諸地域と諸都市」を詳細に検

討し、ジェフロワが「タピスリーの近代化」をどのようなものと捉え、具体的にどのような造形を実現していったのか、その実態と歴史的意義の解明を目指す。

博士論文では、一次史料の整理と作品カタログの作成を基に、ジェフロワ時代のタピスリー製作の全容を把握した上で、当該連作を中心に論を構成している。序章にて、先行研究と第三共和政期のゴブラン製作所の運営状況を確認し、第I章で、ジェフロワ指揮下で製作されたタピスリーの全容を概観する。第II章、第III章で当該連作を構成するタピスリーを個別に考察し、続く第IV章では連作の図像と表象について、当時の政治的・社会的・文化的文脈に即した解釈を行う。終章で、連作の歴史的な位置付けを提示すると同時に、ジェフロワの所長としての業績の再評価を行う。

13点が計画された連作「フランスの諸地域と諸都市」は、1909年に製織開始、ジェフロワ没後の1929年頃まで続行された。風刺画家アドルフ・ヴィレット（1857-1926）の下絵に基づく《パリ万歳》を出発点とする連作は、フランス各地の姿を、その土地固有の風俗や地理的特徴によって描き出している。さらに、下絵作家個人の様式的個性に由来する各タピスリーの様式的多様性は、まさに、様々な歴史的・文化的背景を持つ各地の多様性に連動するものである。首都パリの革命精神と第三共和政の成立過程を視覚化した、政治的メッセージ性の色濃い《パリ万歳》が、連作全体のテーマを象徴的に提示しつつ、それに続く他のタピスリーは、フランス国家が内包する諸地域の多様性を示している。そして、そうした多様性が、19世紀の度重なる政体転換以来、長らくその安定が望まれた共和政という理念の下に集合し、フランス国家を成立させている様が、連作全体を通じて視覚化されているのである。

ジェフロワが連作を企画した背景には、第一次世界大戦へと向かって国際的な緊張関係が高まる中、クレマンソー第一次内閣（1906-1909）が当時直面していた政治的課題の存在があった。各地で多発する労働運動、体制に反対する革命的サンディカリズム、王政復古を求める保守勢力など、共和制それ自体を否定する諸勢力に対処し、国内分裂を回避、共和主義に基づく国家統合の達成を、クレマンソーは目下、課題としていたのである。クレマンソー内閣下で所長となったジェフロワは、こうした情勢と政治的課題の意を汲んで、本連作を構想したと考えられる。

ジェフロワは、それ以前の所長たちが敬遠してきた近代絵画の成果を積極的にタピスリーに取り込み、主題や表現の「世俗化」と、風景と人々の同時代的な描写を重視した。そこには、大戦期を挟んで、寓意像を織り交ぜた伝統的な表現と過去の巨匠たちの様式に対するオマージュが色濃い造形から、「秩序への回帰」をはじめとする当時の絵画動向を反映した新たな造形へ、という緩やかな変化が観察される。加えて、ヨーロッパにおける国民国家の形成期、各国が芸術を通じた自国のアイデンティティを模索するという当時の情勢を背景に、大革命以来、長らく求められてきた共和政体の安定と、多様性の集合というフランス国家特有の姿をタピスリー化することで、フランスが芸術的威信の拠り所としてきたタピスリー製造の伝統や、国家機関としてのゴブラン本来の機能を存続させる努力も同時に行ったと言える。

これまでのモダニズム史観においては積極的な評価が与えられてこなかった当該連作を、ゴブラン独自の性格と近代国家フランスの成立過程に照らして検討することで、所長ジェフロワの功績の諸相と歴史的意義を明らかにした点は、本研究の新知見である。本博士論文は、所長時代の業績の考察を通じて、ジェフロワ研究の欠落点を埋めると同時に、20世紀初頭のフランス・タピスリーの再検討にも寄与するものである。

#### （総合審査結果の要旨）

本論文は、フランス近代の美術批評家ギュスターヴ・ジェフロワ（1855—1926）が、その晩年に国営ゴブラン製作所の所長としてタピスリー制作事業を率いた活動に焦点をあて、ジェフロワの主導のもとに制作されたタピスリー作品を論じたものである。印象派の擁護者としてのジェフロワの批評活動についてはこれまで多くの研究がなされているが、ゴブラン製作所所長としての活動については、過去に必ずしも包括的な学術的検討がなされてきたとはいえない。本論文は、この研究上の欠落を埋める意図をもって、ジェフロワ所長時代のゴブランのタピスリー全般を概観するとともに、特にジェフロワが長期間にわたって注力・推進した連作「フランスの諸地域と諸都市」について詳細に論じたものである。

論文の序章では、まず関係する先行研究について、「批評家ジェフロワに関する研究」と「フランス近代の

タピスリーに関する研究」の二つの観点から詳細にまとめ、本研究の研究史上の位置づけを明確にしている。さらに、フランス革命に際して従来の「王立」から「国立」に変わって存続したゴブラン製作所の歴史を簡潔に概観している。

続く第一章では、ジェフロワの所長就任の背景、当時の製作所の運営システム、ジェフロワに課せられた主要な課題について論じ、その後、ジョフロワ所長時代（1908—1926）に制作されたタピスリーの全貌を紹介している。なお、本節と対応するように、論文の付録資料においては、ジョフロワ時代のゴブラン製作所に関連する一次史料類、および制作されたタピスリーの総カタログを収載している。この資料は、フランス近代タピスリー研究の基礎資料として有用性が高く、評価に値するものである。

第二章では、本論文の中心的な分析対象である連作「フランスの諸地域と諸都市」の、前半部分（すなわち第一次大戦による停滞以前）の諸作品が詳細に論じられる。これらの作品の下絵制作者は、アドルフ・ヴィレット、ジャン＝フランソワ・ラファエリ、ルイ・アंकタンといった、必ずしもこれまでよく研究されてきた画家たちではないが、筆者はこれらの画家たちが起用された経緯、様式的特徴をていねいに考察し、この連作が内部に包摂する多様性を浮き彫りにしている。続く第三章は、同じ連作の後半部分を同様な手続きで分析している。この後半部分でも起用された画家（エドモン・ヤルツ、ガストン・ブルニエら、計8名）の作風は実に多様で、様式的な多彩さが、ある程度まで各地域の風土の多様さと呼応しているように見える。

第四章では、第二、三章の分析をふまえて、連作「フランスの諸地域と諸都市」の制作意図を特定すべく、この連作計画がもつプログラム性と、背景をなす政治的状況の分析が行なわれる。筆者は、ジョフロワの製作所所長就任がフランス第三共和政におけるジョルジュ・クレマンソーの首相就任に付随する人事であったことを確認したうえで、連作の構想とクレマンソー内閣が直面した国内的・国際的な政治課題との密接な関連性を指摘する。それは端的に言えば、国内における政治的分裂を回避し、諸地域の多様性を承認しつつ、共和制の理念の下で国内の融和・統合をはかることであった。この問題に関する筆者の論述は、本タピスリー連作についてこれまでまったく論じられることのなかった側面に光をあてたものといえる。

最後の終章では、連作「フランスの諸地域と諸都市」の歴史的な位置をあらためて考察し、タピスリー芸術の「近代化」への方向性と、フランスの国民様式への希求に由来する伝統回帰傾向との、複雑なからみ合いのなかに本企画を位置付けた。この性格は、批評家ジェフロワの審美的・政治的立ち位置と呼応するものであり、これまであまり注目されてこなかった本連作企画をジェフロワ時代の重要な貢献として評価している。

以上のように本論文は、過去の研究においてあまり注目されてこなかったゴブラン製作所の一時代に焦点をあてて、綿密な検討・考察を加えた研究成果である。この論文は、主として二つの観点から評価することができる。第一に、ジェフロワ所長時代に制作された多くのタピスリー作品について、一次史料に基づく緻密な整理を行ない、基礎資料としてまとめたことである。この成果は、筆者がパリ第十大学修士課程在籍中にまとめた学位論文の成果をベースにしており、20世紀初頭のフランス美術史・工芸史に対する有効な貢献となり得ている。第二に、論述の中心をなす連作「フランスの諸地域と諸都市」に関する分析は、長期にわたる大規模な企画であるにもかかわらず先行研究がほとんど看過してきた研究対象であり、きわめて新規性の高い論述内容として高い評価に値する。もちろん、今後さらに検討を重ねることが望まれる論点は残されてはいる。「フランスの諸地域と諸都市」の下絵制作に関わった画家の多くは、現在ではむしろ20世紀美術史の周縁に位置する作家たちである。彼らの同時代的評価やジェフロワの起用の意図、彼らの絵画様式に付与され得た政治性の問題などをさらに掘り下げて考察することができれば、第一次大戦前後のフランス美術における多様な様式と複雑な政治性の問題をめぐって、いっそう広がりのある研究成果につながっていくであろう。本論文は、そうした方向性への確かな一歩としても評価することができる。